連載企画（オリンピック・パラリンピック④）

野球界からスポーツマンシップを！

長久保 由 治*

一般財団法人 全日本野球協会 専務理事
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square 10階

(2019年12月19日受理)

Promote Sportsmanship from the Baseball World!

Yuji NAGAKUBO*

Baseball Federation of Japan Executive Director,
4-2 Kasumigaoka-cho, Shinjuku, Tokyo 160-0013

(Received December 19, 2019)

1. 日本の野球の始まり

今からおよそ150年前の1872年（明治5年）に、アメリカからやってきた英語教師ホーレス・ウィルソンが、第一大学区第一番中学で英語や数学を教えるかたわら生徒に野球を教えた。同校は翌年から開成学校（現在の東京大学）となり、立派な運動場ができると攻守に分かれて試合ができるまでになった。これが「日本の野球の始まり」といわれている。その後、同校の予科だった東京英語学校（後に大学予備門、第一高等学校）やその他の学校へと伝わり、そこで野球を体験した人達を中心となって野球は日本全国へと広まっていき、今日、日本の文化といってさしつかえないほど、多くの人々に受け入れられるようになった。

2. 野球のおかれている現状

だが、そうした歴史の一方で、今、野球は大きな曲がり角に直面し、さまざまな課題を抱え、もがき苦しんでいるともいえる。とりわけ子供たちの野球離れは、少子化に伴う人口減少の速度以上に急激に進んでおり、競技人口減は避けられない状況にある。さらに、2020年東京オリンピックでは、かろうじて競技種目復活を果たしたが、その次の2024年パリ・オリンピックでは、再び、野球・ソフトボールは競技種目から外れてしまっている。

本稿のいただいたテーマは「野球の楽しさ！ 全世代、侍ジャパン」。競技団体サイドとしては、こうした

「逆風」の中、今年の東京オリンピックで野球の楽しさを、どのように世界にアピールしていくのか。さらには、2028年のロサンゼルス・オリンピックでの競技種目復活はもとより、30年先の野球のあるべき姿を見据えて、どのような動きをしているのかについて触れてみたい。

3. 組織構造からみた野球界の特徴

野球界はサッカーなど他の競技と違って、プロ・アマが一つになったピラミッド型の競技団体としての組織構造をもっていない。Fig. 1にあるとおり、いくつもの団体が長い歴史と違う背景を持ちながら、野球の普及振興および選手強化に取り組んできた。アマ側では大学、高校、社会人、軟式というそれぞれのカテゴリーで独立独歩の競技団体を形成し、またプロ野球も独立した組織をもって事業運営を行なっている。

野球のNF（国内の競技統括団体）である弊協会は、というと、ピラミッドの頂点に位置することはなく、アマチュアの大学、高校、社会人、軟式という連峰さながらの野球団体群を代表する組織として、IF（国際競技統括団体～世界野球ソフトボール連盟（WBSC）～）に加盟し、オリンピックをはじめとした各種国際大会へ日本代表を編成・派遣する役割を担っている。そして国内では、プロ野球の運営団体である日本野球機構（NPB）と日本野球協議会という会議体を構成して、野球界全体の諸課題にプロ・アマ共同で取り組んでいる。

4. プロ・アマ「結束」の象徴・侍ジャパン

そのプロ・アマ共同事業で、最も象徴となるのが、侍ジャパン・日本代表の編成である。

プロ・アマが「結束」し、すべての世代がひとつの野球日本代表となる、というコンセプトのもと、トップチームを頂点に、社会人、U-23、大学、U-18、U-15、U-12、そして女子野球日本代表も含む、すべての世代の野球日本代表を「侍ジャパン」と総称し、プロ・アマ「結束」の象徴として、すべての世代が同じユニフォームを身に纏い、すべての世代で「世界最強」になることを目指して2014年から、世界と戦ってきている。

各世代の頑張りで、世界野球ソフトボール連盟（WBSC）のポイント制による世界ランキングは1位をキープし、2019年11月、WBSC主催のプレミア12（世界ランキング上位12チームによる世界一決定戦）では、プロで構成するトップチームの「侍ジャパン」が初優勝を果たした。東京オリンピックを前に、日本中の野球ファ

* E-mail : nagakubo@bfj.or.jp

Fig. 1. (color online). 日本の野球団体関係図

ンが大いに盛り上がったのは記憶に新しいところだろう。

5. 野球とオリンピック

野球がオリンピックの正式競技に採用されたのは、1992年のバルセロナ・オリンピックのこと。日本は、公開競技だった1984年ロサンゼルス・オリンピックで金メダル、1988年ソウル・オリンピックでは銀メダルを獲得。バルセロナでも銅メダルに輝いている。

その後、96年アトランタまではアマのみで日本代表を編成。2000年のシドニーから初めてプロが代表チームに加わり、2004年アテネ、2008年北京では、プロ出身者が監督を務め、選手もほぼ全員がプロとなった。プロが参加したシドニー以降の3大会の成績は4位、3位、4位と必ずしも期待に応えたとはいえない成績に終わっている。そうした苦い経験を踏まえて、「結束」をテーマに編成される「侍ジャパン」トップチームによる東京オリンピック。世界へ日本の野球の実力をアピールしてのメダル獲得が期待される。

この「侍ジャパン」の各世代日本代表を強化することが、子どもたちの野球へのあこがれを促し、野球という競技に触れる動機付けになることは言うまでもなく、東京オリンピックでの成績が、今後の野球界全体の潮流に大きく影響することは間違いない。そして日本を含めた参加国による野球競技の盛り上がり、ロサンゼルス・オリンピック以降の競技種目復帰へのアピールとなるだけに、2020年夏は、ある種、勝負の時でもある。

6. 指導者ライセンス制度の構築

前述した子どもたちの野球離れという課題については、日本代表の「強さ」だけでは、解決には結びつかない。いま、野球のすそ野を支える、小学生、中学生の現場では、「練習時間が長い、親の負担が大きい、用具にお金がかかる、指導者の暴言、暴力…」など、ネガティブな要因がいくつも指摘されている。こうした事態を打開するには何が求められているのか。それは、私たち組織運営者、現場の指導者が、自らが野球のもつ多様な価値を改めて見直し、そこに誇りをもって自分たちの言葉で発信していくことだと考えている。

ピラミッド型の組織構造を持たない野球界は、残念ながら今日まで体系的な指導者養成や指導者へのライセンス付与といった事業には積極的ではなかった歴史がある。他のスポーツの多くが、ライセンス制度に基づいた指導者養成・教育システムを構築し、社会に信頼を得ながら活動をしている今日では、この点では、完全に取り残された競技といっても過言ではない。何より、子どもたちの保護者から、指導者の資質に、疑問符を投げつけられているのが現実なのだ。

遅まきながら、2020年春からは、野球指導者に対するライセンス制度が、ようやくスタートできることとなった。まずは、野球離れが著しい12歳以下の子どもたちと接するカテゴリーの指導者向け養成プログラムとライセンスを構築。その後は、指導対象となる選手の年齢

にマッチした指導者ライセンスを作り上げていく計画である。

7. すべての野球人へスポーツマンシップを

この指導者養成プログラムの中で、とりわけ重きを置いているのが、「スポーツマンシップ」の現場への浸透だ。野球に限らず、多くのスポーツの開会式で行われる選手宣誓の時に決まって「スポーツマンシップにのっとり」というフレーズが使われている。多くの人が耳慣れたこの「スポーツマンシップ」だが、改めてその意味を問われたときに、戸惑うのも現実ではなかろうか。スポーツをする上で大切な精神、心構えであることは理解しながらも、きちんと説明できるか、といえは必ずしもそうではない。

英英辞典によれば、「sportsman」という単語には、「good fellow = 良き仲間」という訳が記されている。スポーツマンシップがスポーツマンらしさであると考えれば、単にスポーツができることにとどまらず、スポーツを正しく理解し楽しむことができて、人として信頼に足るよき人物、良き仲間であると言い換えることができるのではないだろうか¹⁾。

弊協会では、野球というスポーツを通して、人を育てる。この考え方を大切にしたい。具体的には、スポーツマンシップにおける最も重要な要素を「他者への尊重」と位置づけて、挨拶や礼儀という作法だけでなく、相手を尊重し、ルールやマナーを尊重し、審判を尊重し、そして野球そのものを尊重する。その中で一生懸命に勝利を目指してプレーをするという気持ち・精神を育てていくという考え方を、指導者養成プログラムに盛り込み、野球の現場に浸透させていくことをテーマとして、事業を推進していく方針だ。

野球は、投げる・捕る・打つ・走るといったさまざまな技能の鍛錬を通じて、多様な運動能力を向上させることができる。作戦や駆け引きを通じて、技術や体力が上回る相手からも得点を奪うことも可能な頭を使うスポーツだ。チームメイトとの連携・協力・さまざまな体験の共有を通じ、コミュニケーション能力を磨き、友情を育むこともできる。他にも、まだまだ野球というスポーツ

の魅力はあるだろう。

野球という競技を通じて、スポーツマンシップをみんなで体現し、たくさんの良き仲間に出会い、交流を深める。そんな環境作りが、とりもなおさず、保護者からの信頼を取り戻し、結果、子どもの野球離れを防ぐ。さらには、野球そのものの質を高めることにつながるという、強い思いで、取り組んでいきたい。

8. 東京オリンピックで野球を世界にアピール！

今夏の東京オリンピックは7月24日に新国立競技場で開会式を迎える。

野球は、7月29日、福島・あづま球場での開幕戦に日本が登場し、その後は、舞台を横浜スタジアムに移して、8月8日の決勝戦まで、まさに熱い戦いを繰り広げることになる。参加チーム数は6カ国・地域。そのうち、日本、イスラエル、韓国、メキシコの4カ国がすでにオリンピック代表権を獲得している。残りの2枠は、アメリカ大陸予選からの1チームと、その後の世界最終予選による1チームが3月には決定する予定だ。

日本が出場する試合のスタンドは、おそらく満員のファンで埋め尽くされるだろう。しかしながら、それで満足することはできない。世界の野球ファミリーには、野球を再び、オリンピックの大舞台で復活させたいという共通の願いがある。

その意味でも、東京オリンピックの舞台はとても大事なアピールの場となる。2028年ロサンゼルス・オリンピックでの競技種目復活のために、日本戦だけでなく、すべての対戦カードで、横浜スタジアムのスタンドを満員の観衆で埋め尽くす。野球のすばらしさを世界中に発信する。そんな東京オリンピックになるよう、野球界すべての力を結集し、努力を続けていきたい。

文 献

- 1) 一般社団法人日本スポーツマンシップ協会編 IOC 発行非売品: “ハンドブック スポーツマンシップの基礎知識” 2019年6月1日 第2版第1刷。